

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 24 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730243

研究課題名（和文）社会に偏在する企業家

：社会現象としてのベンチャービジネスに関する研究

研究課題名（英文）The omnipresent entrepreneurship in society

：Venture businesses as social phenomenon

研究代表者

高橋 勅徳 (Takahashi Misanori)

首都大学東京・社会科学部研究科・准教授

研究者番号：70352482

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、欧米における企業家研究の理論的・方法論的転回を踏まえた、理論的・経験的研究を行うことを目的としている。理論的研究としては、制度派組織論、社会企業家研究および経営学の実践的転回に関する文献レビューを実施し、あらたな理論的フレームワークを提示した。経験的検討については、主として大阪市におけるクリエイター集積、沖縄県・北海道におけるエコツーリズム、老舗企業の事業転換に関する調査を行い、経験的分析を行った。

本研究課題から得られた研究成果は、国内の主要学会で研究報告を実施した上で、査読付き論文として掲載された。

研究成果の概要（英文）：

Purpose of this research issue is theoretical and methodological turn in entrepreneurship research. Especially, this research issue considers practical turn by Europeans research group and introduces their issue to Japanese research group. To this purpose, this research issue tries theoretical - methodological review and empirical analysis of contents creators in Osaka city, eco tourism conductor in Hokkaido/Okinawa, entrepreneurial long established company. The results of this research issue are published in academic journal of major at Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,117,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・経営学

キーワード：ベンチャー 中小企業 環境政策 社会学 経営学

1. 研究開始当初の背景

本研究課題を開始した動機にあるのは、欧米における企業家研究の実践的転回の出現にある。欧米では 2000 年代以後、企業家を

革新の担い手としてヒロイックな主体として位置づけ、その心的特性や行動の特徴を捉えようとする従来の研究の理論的課題を指摘した上で、社会的現象として企業家を捉え

直し、方法論的深耕が進められてきた。

これに対して我が国の企業家研究は、欧米におけるこれらの理論的・方法論的転回の存在すら知り得ていない状況にあった。そこで本研究課題を開始することで、欧米における企業家研究の実践的転回を踏まえた上で、理論的・経験的検討を進め、我が国の企業家研究の研究水準を向上せしめることを目的として企画された。

2. 研究の目的

本研究課題は、社会的現象としてのベンチャービジネスを捉えるために、欧米における先端的研究事例の理論的・方法論的検討に加え、その検討に基づいた経験的検討を行うことで、我が国における企業家研究の研究水準を押し上げることを目的としている。

企業家研究は、変革の遂行者たる企業家を鍵概念とし、新結合（イノベーション）を把握し、理解していく研究領域である。シュムペーター（1926）によって企業家概念が提起されて以後、企業家研究は企業家の特殊な動機に注目する心理学的研究および認知的研究、企業家の特異な行動の記述を目指す行動研究が中心であった。しかし、社会に変革をもたらす企業家が、何故、社会の内に出現し、特異な行動が許されるのかについて、先行研究では十分な説明が為されてこなかった。

この理論的課題に対して、欧米では 1980 年代後半より、言語論的転回（linguistic turn）を通じた解決が試みられる。これは、企業家を実在物ではなく、我々がイノベーションを把握するための分析起点であるというシュムペーターによる概念規定に立ち戻った上で、社会的構成物たる企業家概念の下で成立する社会現象の分析を目指すという理論的・方法論的転回であった。欧米における企業家研究は、このような理論的視座の下で、理論的基盤として社会構成主義および制度派組織論、方法論的基盤としてナラティブ・アプローチ、アクターネットワーク理論、言説分析を接收し新たな研究アジェンダを構築しつつ、NPO・NGO や個人事業種、ファミリービジネスなどこれまで注目されていなかった調査対象を開拓してきた。

本研究課題は、欧米における企業家研究の新たな理論的潮流について、その理論的・方法論的基盤にまで遡って検討を加えつつ、我が国の事例に基づく骨太の経験的検討を行うことを目指してきた。

3. 研究の方法

この研究目的を達成するために、本研究課題では、①欧米における企業家研究の制度派アプローチ、社会企業家研究、企業家研究の実践的転回といった先端的研究の理論的・方法論的検討を行った。加えて、具体的な経験

的検討として、②神戸市元町地域 や大阪市天満界限での企業家集積、沖縄・北海道におけるエコツーリズム、老舗企業の存続における企業家精神の発露などといった事例に基づいた経験的検討を行った。

これらの理論的・方法論的・経験的検討から得られた研究成果については、組織学会、日本経営学会、日本情報経営学会、日本ベンチャー学会、日本村落社会研究学会などで研究報告を実施した上で、『組織科学』、『日本経営学会誌』、『ベンチャーズレビュー』、『経営と制度』、『年報村落社会研究』などの査読付き雑誌に投稿された。

4. 研究成果

本研究課題から得られた研究課題は、①欧米における企業家研究の理論的・方法論的転回のレビュー、および②我が国における事例にもとづいた経験的検討に分かれる。本研究課題の主たる研究成果は、以下の通りである。

まず、①理論的・方法論的検討については、近年の企業家研究における理論的新潮流である制度的企業家概念について、『組織科学』に査読付き論文（「制度的企業家というリサーチ・プログラム」）が掲載された。また、企業家研究における社会構成主義の学説史的検討が、滋賀大学研究叢書（『企業家の社会的構成：組織/集団の再生産と企業家精神』）として発刊された。更に、制度派組織論・社会構成主義に基づく企業家研究の新たな理論的潮流である実践的転回について、『経営と制度』に査読付き論文（「秩序構築の主体としての社会企業家：倫理・社会資本・正統性概念の再検討を通じて」）が掲載された。

これら理論的検討に加えて、方法論的検討として『国民経済雑誌』に論文（「企業家語りに潜むビック・ストーリー：方法としてのナラティブ・アプローチ」）が掲載された。現在、我が国には欧米の企業家研究の理論的・方法論的転回に関する制度的企業家概念に関する包括的なレビューが行われていないため、これらの研究業績は非常に重要な学術的意義を有すると考えられる。

更に本研究課題では、これらの理論的・方法論的転回の検討に基づき、②我が国の事例に基づく経験的検討が行われた。具体的には、大阪市天満界限におけるクリエイター集積に関しては、『組織科学』に査読付き論文（「産業クラスター形成における地理的近接に基づく関係構築のプロセス：大阪扇町界限におけるインキュベーション・マネジャーとクリエイター間の関係性の変化」）に掲載され、編著（*Industrial Innovation in Japan*）の第 11 章として出版された。更に、コンテンツ産業におけるクリエイターの関係構築に関する論文（「言説への（再）接続と解除と

しての制度化：フリーランス言説における騎士・従僕・英雄」および「制度的企業家の言説分析：フリーランス・クリエイターの世界」）がリサーチペーパーとして公刊された。また、沖縄におけるエコツーリズム事例については、『年報村落社会研究』に査読付き論文（「地域産業の展開と野生生物資源管理組織の構築への取り組み：座間 味村のダイビング事業者による「害獣」の発見とエコツーリズムの導入」）が掲載された。これらの経験的検討は、アクターネットワーク理論、言説分析、分厚い記述といった、先行研究では用いられてこなかった方法論を用いた経験的研究である点で、一定の評価を受けている。

本研究課題では、これら方法論の新展開に基づく経験的検討だけでなく、企業家研究の理論的展開に基づく経験的検討を併せて実施された。具体的には、制度派組織論の理論的視座から企業家精神の発露に関する経験的検討が、『日本ベンチャー学会誌・Ventures Review』に査読付き論文（「埋め込まれた企業家の企業家精神：神戸元町界隈における華僑コミュニティを事例として」）が掲載された。これは、移民企業家という我が国の企業家研究において見逃されてきた現象であった点で、査読付き雑誌に掲載されたことの理論的意義は大きい。実際、2009年に日本ベンチャー学会・清成忠男賞を受賞するだけでなく、経営学以外の学会（日本村落社会研究会）にも評価され、査読付き論文が掲載されている。この論文に加えて、環境系ベンチャー企業の制度派組織論に基づく理論的検討（「環境経営の制度派アプローチに関する理論的考察」）が『経営と制度』に、査読付き論文として掲載され、この理論的展開に基づく経験的検討（「社会的企業-社会企業家の理論的・経験的検討：座間味村におけるダイビング産業の成立とサンゴ礁保全組織の形成を通じて」）が『首都大学東京リサーチペーパーシリーズ』として公刊された。更に、企業家研究の理論的展開をもたらす基礎理論として注目を集める社会運動論に基づき、産学連携ベンチャー企業の理論的・経験的検討（「イノベーションの闘争モデル：大学発ベンチャーの生き残りをかけた闘争過程」）が日本経営学会学会誌に掲載された。

また、本研究課題は企業家研究の理論的・方法論的転回に基づき、従来の研究に於いて注目されてこなかった新たな調査対象の開拓を行った。具体的には、伝統建築業界における長期存続企業の生き残りを企業家精神の発露として捉えた経験的研究、および北海道におけるエコツーリズム推進を社会企業家の登場という観点から分析した経験的研究が、『首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』として公刊された。

以上のように、本研究課題で実施した理論的・方法論的検討および経験的調査については、国内の主要学会で報告した上で、各学会の学会誌に査読付き論文として掲載された上で、国内外で著書として出版された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計18件）

- ① 高橋勲徳 (2012) 「秩序構築の主体としての社会企業家：倫理・社会資本・正統性概年の再検討を通じて」『経営と制度』第10巻, 1-12頁, 査読付き.
- ② 高橋勲徳 (2012) 「スポーツフィッシングの成立による鱒類の資源化：北海道・阿寒町を事例として」『首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』, No. 104.
- ③ 宇田忠司・高橋勲徳 (2012) 「言説への(再)接続と解除としての制度化：フリーランス言説における騎士・従僕・英雄」『首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』, No. 103.
- ④ 曾根秀一・高橋勲徳 (2012) 「企業の存続を可能とする関係構造：株式会社大彦組の事例」『首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』, No. 100.
- ⑤ 山田仁一郎・高橋勲徳・松嶋登 (2011) 「イノベーションの闘争モデル：大学発ベンチャーの生き残りをかけた闘争過程」『日本経営学会学会誌』第27巻, 27-40頁, 査読付き.
- ⑥ 稲垣京輔・高橋勲徳 (2011) 「産業クラスター形成における地理的近接に基づく関係構築のプロセス：大阪府堺界隈におけるインキュベーション・マネジャーとクリエイター間の関係性の変化」『組織科学』第44巻第3号, 21-36頁, 査読付き.
- ⑦ 高橋勲徳 (2011) 「社会的企業-社会企業家の理論的・経験的検討：座間味村におけるダイビング産業の成立とサンゴ礁保全組織の形成を通じて」『首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』, No. 84.
- ⑧ 高橋勲徳・曾根秀一 (2010) 「建設業界の競争戦略：株式会社竹中工務店の事例」『首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』, No. 72.
- ⑨ 吉田満梨・高橋勲徳 (2010) 「伝統産業におけるイノベーション：坂本乙造商店の事例」『首都大学東京大学院社会科学研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』, No. 70.

- ⑩ 高橋勅徳(2010)「地域産業の展開と野生生物資源管理組織の構築への取り組み:座間味村のダイビング事業者による「害獣」の発見とエコツーリズムの導入」『年報村落社会研究』第46巻, 115-148頁, 査読付き.
- ⑪ 石黒督郎・高橋勅徳(2010)「環境経営の制度派アプローチに関する理論的考察」『経営と制度』第9巻, 65-79, 査読付き.
- ⑫ 稲垣京輔・高橋勅徳(2010)「企業家研究における分厚い記述:大阪天満界隈で活動するクリエイター間の関係形成の変化」『法政大学イノベーション・マネジメントセンター ワーキングペーパー』, No. 95.
- ⑬ 松嶋登・高橋勅徳(2009)「制度的企業家というリサーチ・プログラム」『組織科学』第43巻第1号, 43-54頁, 査読付き.
- ⑭ 高橋勅徳・松嶋登(2009)「企業家語りに潜むビック・ストーリー:方法としてのナラティブ・アプローチ」『国民経済雑誌』第200巻第3号, 47-69頁.
- ⑮ 高橋勅徳・曾根秀一(2009)「老舗企業の存続を巡る「暖簾」と「近代化」:老舗宮大工企業の存続に関する一考察」『首都大学東京大学院社会科学部研究科経営学専攻リサーチペーパーシリーズ』, No. 63.
- ⑯ 高橋勅徳(2008)「埋め込まれた企業家の企業家精神:神戸元町界隈における華僑コミュニティを事例として」『日本ベンチャー学会誌ベンチャーズレビュー』第4巻, 23-32頁, 査読付き.
- ⑰ 宇田忠司・高橋勅徳(2008)「制度的企業家の言説分析:フリーランス・クリエイターの世界」『北海道大学大学院経済学研究科 Discussion Paper Series B』, No. 200879.
- ⑱ 松嶋登・高橋勅徳(2008)「制度的企業家の理論射程」『神戸大学大学院経営学研究科 Discussion Paper Series』, No. 2008-39.

[学会発表] (計10件)

- ① 宇田忠司・高橋勅徳(2011)「権力関係の解除と再接続のための言説分析:フリーランス言説における騎士・従僕・英雄」日本情報経営学会, 於神戸大学, 7月2日.
- ② 高橋勅徳(2010)「社会的企業-社会企業家の理論的/実証的分析:座間味村におけるダイビング産業の成立と珊瑚礁保全組織の形成を通じて」日経企業行動コンファレンス, 於富士教育研修所, 12月11日.
- ③ 高橋勅徳(2009)「村の野生生物とグリー

ン・ツーリズム:座間味村におけるダイビングビジネスの成立と珊瑚礁の「被害」/「管理」日本村落社会研究学会, 於綾部市, 10月31日.

- ④ 山田仁一郎・高橋勅徳・松嶋登(2009)「イノベーションの集合的行為モデル:パイオベンチャーのイニシアティブ争奪を通じた技術開発と事業創造」日本経営学会, 於九州産業大学, 9月3日.
- ⑤ 稲垣京輔・高橋勅徳(2009)「組織フィールドと地域コンテクスト」組織学会, 於東北大学, 6月6日.
- ⑥ 松嶋登・高橋勅徳(2009)「制度的企業家概念のディスコース:制度派組織論への理論的含意」日本経営学会関西部会, 於大阪市立大学文化交流センター, 1月10日.
- ⑦ 稲垣京輔・高橋勅徳(2008)「起業家の地域内での関係構築に対するコミットメントと事業空間の多様性」日本ベンチャー学会, 於神戸大学, 11月16日.
- ⑧ 稲垣京輔・高橋勅徳(2008)「中小企業の事業空間の再構築と地域内活動における意味形成」日本経営学会, 於一橋大学, 9月4日.
- ⑨ 稲垣京輔・高橋勅徳(2008)「支配的な組織フィールドにおける起業戦略の多様性」企業家研究フォーラム, 於大阪大学中之島センター, 7月13日.
- ⑩ 桑田耕太郎・松嶋登・高橋勅徳・水越康介・宇田忠司・山口みどり(2008)「制度的企業家をめぐる理論射程の経験的検討」組織学会, 於神戸大学, 6月7日.

[図書] (計2件)

- ① 高橋勅徳(2008)『企業家の社会的構成:組織/集団の再生産と企業家精神』滋賀大学研究叢書, 全172頁.
- ② Misanori Takahashi (2008) "Analysis of the Innovation Process Created through the Management of Business Incubators in the Japanese Content Industry" in Takushi Hara, Norio Kanbayashi, Noboru Matushima (eds.) *Industrial Innovation in Japan*, Routledge, pp.192-208.

[その他]

2009年11月に日本ベンチャー学会学会賞・清成忠男賞を受賞した。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 勅徳 (Takahashi Misanori)

首都大学東京大学院 社会科学部研究科

研究者番号: 20730243